

---

# 姉が俺のこと好きだってさ.....えっ!?

竹野けた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

姉が俺のこと好きだったさ……えっ!?

### 【Nコード】

N3197Z

### 【作者名】

竹野けた

### 【あらすじ】

「私の初恋の相手は実の弟よ」  
主人公”相崎優太”は、ある日突然キスをした。しかしその相手は主人公の実の姉だった!?  
弟を振り向かせるため奮闘する姉、姉の誘惑に抵抗する弟のブラコンラブコメディー!

この作品には作者の強い願望が一部含まれております。その為、過激な性的描写がある恐れがございます。警告タグをご確認し、苦手な方は無理にお読みにならないことをお勧め致します。

## 第1話 私は……本気よ

「ねえ優太<sup>ゆうた</sup>。私、優太のことが好きなのよ？」

夢だ。

「ねえ優太。私と付き合いましょ」

これは夢だ。

「ねえ優太。私とデートしよっ？」

夢じゃなきゃダメなんだ。

「ねえ……優太。……き、キスしよ……」

夢じゃないと

「ゆう……た……。私と……今晚一緒に……」

夢じゃないとダメなんだ。

「優太……。私たち だけど、関係……無いよね？」

頭痛がする。別に風邪を引いたわけじゃない。  
じゃあなぜ。

なあに、理由は簡単。夢だ。

どういっわけか最近、変な夢をほぼ毎日見る。

夢の中の俺がなぜか謎の少女に告白されたり、キスを求められたり、さらに言々と男女の……アレまでも求めてくるのだ。

これって良い夢として捉えていいのだろうか。

夢の内容を考えた感じでは、俺はほぼ毎日素敵な夢を見ている幸せ者かもしれない。

でも、少し気にかかる点もいくつかある。

一つ目はその謎の少女の顔がわからないこと。あと一步で顔が見える！ というところでもいつも目が覚めてしまう。

そして二つ目、それは謎の少女の声が日を重ねるごとに声が歪んで聞こえるのだ。初めてこの夢を見た時ははっきりと透き通るように、夢の中の俺へと届いていた。

しかし、その夢を見始めて約一週間。なぜかその謎の少女の声は、まるでトンネルの中で叫んだかのように歪んで聞こえるのだ。

……これは一体何を意味しているんだろうか。

軽い頭痛を頭に抱えながら、俺  
相崎 優太は布団から

体を起こした。

季節は春、でも夏になりそうといった何とも言えない微妙な時期。それでも俺は冬の寒さ、夏の蒸し暑さを感じることなく、清々（すがすが）しい朝を迎えた。

「あつ、優太。おはよ」

「……おはよー姉さん」

寝かしていた体を起こし、まだ微かにぼやける視界を目で擦っていると、台所の方から聞きなれた声が聞こえてきた。

俺のひとつ上の姉、相崎 亜衣だ。

今俺は高校二年生だから、つまり姉の亜衣あゐは高校三年生ということになる。おまけに学校は同じ学校に通っている。

「ほら、朝ご飯できてるから、さっさと食べて」

「……はいはい」

俺は机の上に置かれた食パンにバター塗り、そのままかぶりつく。自慢して言えるものではないが、我が家は俺と姉の二人暮らしをしている。

理由は父親の海外への単身赴任だ。

父親の単身赴任が決まった時、父親は「大丈夫、安心して待っていてくれ!」と、自信満々に言っていたが、それを聞いた母親は「キャベツとレタスの見分けすらつかない人を一人にできないわよ」とそのまま父親について行ってしまったのだ。

息子達おれたちを残して。

ちなみに我が相崎家は五人家族だ。父親に母親、俺に姉さん、そして妹もいる少し騒がしい家族なのだが、父親と母親が海外へ行くと決まった時、「あたしも行く!」とそのまま妹も海外へ旅立ってしまった。

両親は息子達を残して海外へ行こうとするわ、妹は海外へ行きたいという理由だけで海外へ留学? するわでもう、我が家はある意味崩壊してるのである。

それでも一応、月に一回両親から生活費は貰っているのだけど。

そして今現在、俺と姉さんは面倒な役目を負わされている。

思い出すだけのために息が出るから、機会があるまで忘れていよう……。

「優太ー、そろそろ学校行くわよ」

「あー先行って。ちよつと便所」

「はあ……。待ってあげるから早くしなさい」

「いや、待たなくてもいいのに」

朝食をとり終わった俺は、トイレで用を足し、玄関で待っていた姉さんと渋々一緒に登校した。

学校が終わり放課後、俺は夕食の準備も兼ねてスーパーに来ていた。

俺と姉さんは家事をそれぞれ役割を決めて生活している。

例えば朝食、朝食は先に起きた人が準備するという決まりになっている。

他にも洗濯、アイロンがけは常に姉さん、学校の昼食の弁当、夕食、食器洗いは常に俺と役割を決めているのだ。

ちなみに役割の決め方はじゃんけんで、俺は見事に全敗し、飯を作るという面倒な役割になったというわけだ。

「今日は野菜炒めでいいか」

スーパーで買い物を終え、俺は買い物袋を片手に自分の家へと向かう。

しばらく歩くと、いつもの見覚えのある赤い屋根のアパートが目に入ってきた。

これが俺と姉さんが生活している場所だ。

台所に押入れ、お風呂もあり、小さめのベランダもある。二人暮らしには何一つ不自由の無い環境だ。

カツカツと二階建てのアパートの階段を上がっていく。

「ただいまー」

「おかえり優太、さっさとご飯作りなさい」

「帰ってきたばっかの奴にそんなこと言うなよ」

「いいじゃない。ご飯担当は優太なんだから」

「……はあ」

俺はため息をつきながらもスーパーで買った食材やらを冷蔵庫へと入れていく。

あつ、牛乳買っの忘れた。

「ねえ優太。今日の夕食は何？ 私うどんが食べたいわ」

「野菜炒め」

「チツ」

「舌打ちすんな！」

なんでこの姉はこうも上から目線なんだ。まあいつものことだけど。

「ホントに野菜炒めなの？ 一昨日食べたわよ」

「毎日毎日メニュー変えられるほどの調理技術があると思うな」

「……使えないわねえ」

「あああああああもう！ わかったよ、うどん作ればいいんだろ、うどん作れば！」

俺は半ば<sup>なか</sup>イライラしつつも、夕食のメニューを「野菜炒め」から

「うどん」へと変更した。

姉さんに刃向うとロクなことが起きない。

前に姉がリクエストしてきた弁当のメニューを、俺はすっかり忘れており、唐揚げを入れると言われていたにも関わらず、間違えてもやし炒めを入れてしまった時はヤバかった。

俺の上に馬乗りされて百回謝るまで許してくれなかった。……今でも忘れられない。

「ふふっ、やっぱり優太は優しいわねー」

……反抗したら何されるかわかったもんじゃないからなあ。

「ねえ優太。私」

「何？」

俺がそう聞き返したとき、姉は俺の後ろに立ち、後ろから抱きついてきた。

「ちよっ、くつつくなよ」

「私、優太のことが好きなのよ？」

「はっ！？ 何をバカなことを言っ

」

俺が言おうと思ったことを口に出し切る前に、俺の唇は姉さんの唇と重なり、ふさがれた。

「私は……本気よ。だって、初恋の相手は優太だもん」

姉さんはそう言って再び俺にキスをした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3197z/>

---

姉が俺のこと好きだってさ.....えっ!?

2011年12月11日02時57分発行